

<あのころの「誌要」>若人潤歩：一九六〇年代の『日本文学誌要』

西野，春雄

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2019-07-27

〈あのころの「誌要」〉

若人潤歩

——一九六〇年代の『日本文学誌要』——

編集長益田勝実先生の文章である。

▼いろいろな面で新しい脱皮が必要なところに来ているのが、現在のわたしたちの『日本文学誌要』だ、と思います。国文学会常任委員会や機関誌編集委員会でも、いつも議論はそこに集中します。

本年度の編集を担当したわたしたちも、一年こっきりの改変ではない、長期展望の上に立つての『日本文学誌要』の新しい性格を作り出していこう、と話合っています。急に開花し、また急にしぼんでいく一輪咲きの花のようなあでやかにではないが、次々と親しみぶかい顔つきの実のなる花を開く、花季の長い花の育種に専念したいのです。

第一に、顔を外から内へ向けかえる。学生会員が欠かさず参考にしてくださるものにした。第二に、内部に相互批評の活発な行き交いをもし出す。単なる業績発表の場に終わらせないで。まず《講座》欄を開きました。次号からだんだんと。乞応援。(益田勝実)

『日本文学誌要』がめでたく百号を迎えた。まず、編集方針を定め、企画立案し、充実した誌面をめざして来られた歴代の編集委員会に感謝申し上げる。そして、いくつか原稿も書き、そのころは活版印刷で、第二号(一九五九年三月)から第二一号(一九七〇年三月)までの印刷所だった東銀座印刷株式会社に出張校正もした委員の一人として、皆様と共に百号の刊行を祝いたい。

*

一六〇〇年ごろイエズス会が長崎で出版したキリシタン版の表紙に学んだユニークなデザインの『日本文学誌要』。百号の歩みを通覧するとき、今も心に残る、そしてこれからも「誌要」の方針であり続けてほしいと願う一文を紹介したい。

それは、一九六七年一〇月発行の第一八号の編集後記で、

編集者として、常心がけるべきことを示された文章であり、「学生会員が欠かさず参考にしてくださるものにした」という企画は、早速、第一八号の駒尺喜美氏による講座「夢十夜」覚え書の連載から始まった。第一九号には、おもてあきら氏の『風姿花伝』抄釈(その一)が続き、一

九六八年三月発行の第二〇号からは、新鮮な響きの「若人
闊歩」が新たに設けられた。その趣旨は、

学問には年季を要するかもしれない。しかし、それだ
けが学問を推進する力であつてはなるまい。最も若い
会員層はなにを考えているのか。あの若々しい頭脳の
中でひらめいていることをなまのままで汲み上げてみ
るべきではないか。ことし学部を巣立つた人々の論壇
を開こうとする、わたしたちの企ては、そういう未来
形の人々の持つエネルギーへの期待にささえられてい
る。

という言葉に明らかだろう。ネーミングもよく、当時の編
集委員会が如何に若い会員の研究発表に期待しているかが
伝わってくる。事実、本欄には、毎号、関本直子氏「『縁
前後』、杉浦良子氏「西行論」、三原孝子氏「説話文学の世
界」など、若手の優秀論文が続いた。今後とも生かしてい
ただきたい方針である。

*

ところで、その第一八号には特別の思い出がある。発端
は、私事で恐縮ながら、学部時代に観世寿夫の能に魅せら
れ、卒業論文も能で書き、能楽研究を志して大学院へ進ん
だ一九六六年四月、指導教授表章先生の中世文学演習で、
世阿弥自筆能本《タ、ツノサエモン》(多度津左衛門)を讀

んだときのことである。応永三十一年(一四二四)一月に
世阿弥が書写した能本で、翻刻もあつたが、語句の注釈も
作品研究もなかつた。

内容は、女人禁制きんせいの高野山に、旅芸人の男曲舞くせま々に扮し
て、父の多度津左衛門(ワキ)を尋ねる姫(子方)と乳母めのと(シ
テ)の物語である。宗教的戒律のため父と名乗れぬ親、父
とは知らず言葉を交わす姫が父に杖で打たれるが、その杖
が父子再会の縁となるという女物狂いの能である。世阿弥
自筆本が伝わるだけで、演能記録も何もない。作られたも
の、何らかの事情でお蔵入りした作品らしい。

演習は日本文学専攻の授業でも使われていた五十三年館
(当時の新聞に「ガラス張りの大学院」「ネオン輝く大学院」と報道
された大学院棟)の二階の教室(国文学学会常任委員会も編集委
員会もここだった)。受講者は楕円形のテーブルに着席。巻
子本の自筆能本の紙焼きを広げ、あらかじめ先生が幾つか
の部分に分け着席順に担当者を決めていったが、端に座つ
ていた私の前で終わり、発表を免れたと思つたその瞬間、
「君は物狂い能全体を総括せよ」という課題が出された。

注釈も何もない真つさらな能本を読解するのも面白いが、
《タ、ツノサエモン》や古作能《丹後物狂》(魔絶曲)、《柏崎》
《桜川》《三井寺》《隅田川》など、古今の物狂い能全般を
比較・考察して、そこから問題を見つけるのも研究意欲が
湧く。夢中になつて調べ、考え、レジュメを配り、「物狂
能の系譜」と題して発表した。

結論を言えば、儀理能（云話主体の劇的筋立ての能）から物狂い能への転換と、観客が心ときめかせる歌舞・風流能から物狂い能への変化の、二つの流れを想定した。譬えて言えば、物まね・儀理を父とし、歌舞・風流ふうりゅうを母として生まれてきたのではないかと推察した。

幸い、一九六七年度の国文学会総会で発表することになり、さらに推敲して臨んだが、当時『日本文学誌要』の編集長だった益田勝実先生が前列で聴いておられた姿を半世紀以上も前の事ながら覚えていた。そして、その時の発表要旨を、第一八号に載せていただいた。私にとって初めての学会発表であり、要旨ながら初めて掲載された学会誌が『日本文学誌要』なのである。

*

その後も廢絶曲の研究にも取り組み、一九六八年六月発行の第二一号に「儀理能の古態―作品研究「横山」―」を発表した。内容は、中世の東国武士の生活を背景に、落魄のなかの夫婦愛、横山を尋ねる鎌倉遊女の氣質を描く。横山が草を刈る場面に風情があり「草刈の能」と呼ばれ、観阿弥が神技を見せた古作能の佳品である。

様々な説話や故事を引き、長大で、草を刈る場面の労働的な草尽くしの歌も面白い。劇中歌のような座興的で独立性の強い語り物や、シテ謡の文句の途中から同音（地謡）が謡う、古作に顕著な音曲上の特殊性などが指摘できる。

その後《横山》は「セリフ劇の発見」というテーマで、

一九八七年「能楽鑑賞の会」で復曲・上演した。共に運営委員だった羽田昶氏と西野の共同演出で、能本作成は横道萬里雄氏。役籍が固定する以前の古作能にふさわしく、シテ方・ワキ方・狂言方の役籍を解放した台本を作成され、主人公の横山をワキ方の宝生閑氏、その妻を狂言方の山本東次郎氏、遊女初雪をシテ方の山本順之氏、横山の家臣、久米川を喜多流の友枝昭世氏、地謡は観世鏡之丞氏が率いる鏡仙会のメンバーが勤めた。『日本文学誌要』に発表した若い頃の作品研究が舞台に生かされたのだった。

なお《多度津左衛門》は、一九八八年、観世流の大槻文藏氏が伊藤正義氏らの協力で復曲し、何回か演じられた。大学紛争が激しくなってきた『日本文学誌要』も一九七〇年三月発行の第二二号で中断し、第二三号が発行されたのは十年の空白後の一九八〇年二月だった。

（に）のしのはるお・本学名誉教授